

10月20日(木)

おはようございます。

今日は大北先生から興味深い英語の文章がありますよと教えてもらったこととお話しします。それを訳してくれたのは美馬本先生です。

ノーレットランダーシュという人の文章ですが、彼はデンマークのジャーナリストです。大北先生や美馬本先生がこの文章にどうやって出会ったのかというと、今年の慶応大学の入試問題に出たところからです。内容はアルトルイズムについてです。アルトルイズムとは利他主義のことです。この利他主義はもうそろそろ考え方を変えなくてはいけないのではないかというものです。そういう衝撃的な書き出しで始まっています。利他主義の生き方が終わりを迎えているというのは、人の役に立つのは意味のないことだ、というのでありません。アルトルイズムという言葉を最初に使ったのは1850年代でフランスの社会学者オーギュスト・コントです。これはエゴイズムに対立する言葉でした。自分のことばかり考えるのがエゴイズムです。それに対して他人のことばかり考えるのがアルトルイズムです。

このアルトルイズムに対して、ノーレットランダーシュは、自分のことを考えることと、他人のことを考えることは、渾然一体となったことであり、自分のことと他人のことというふうに二層構造に分離してはいけないと考えたのです。だから、二つに分けてしまったこと自体によってもう終わりではないかというのです。要するに他人に親切にするのは、必ず自分の幸せにかえてくることだというのです。

以前ダライ・ラマ法王がここに来られて生徒に法話をされたとき、皆は、自分の未来に関して関心があるか、それとも、これから世界がどうなっていくかということに関心があるか、どちらですかと聞かれました。世界に関心があるひともわずかだったけれども手をあげて、「ちょっとはいるか」と言ってダライ・ラマ法王は笑われました。そのとき法王は、これだけ世界が密接にかかわりあっている時代に、たとえば、世界のほとんどの人が猜疑心と敵愾心とで苦しみ悩んでいるときに、自分一人だけ幸せになることは難しい、逆に世界の人々が助け合いや博愛の精神で一生懸命支えあっているときに、自分一人だけ不幸になることもまた難しい、そういう意味で自分の幸せは世界の人々の有り様と関係しているのだとおっしゃいました。だから世界のことを考えることは、実は自分の将来を考えることにそのままつながっているのだということをお話し

されたのです。

この、ノーレットランダーシュもまったく同じことを言っています。彼は、いま60歳くらいですが、2014年にこの文章を書いているようです。こういう考え方が注目され取り上げられるようになったのは、時代が少しずつ変わってきているからだろうと思います。自分のことばかり考えるのではなくて、自分のことを考えるのであれば他人に親切にきなさいということが結論として出てきます。真のエゴイストは他人に親切にしないでならない。未熟なエゴイストは自分のことだけ考えている。真のエゴイストは、他人に親切にしたり、優しくしたりして、ほかの人の役に立ったら、必ず自分に返ってくるということが分かっているのだと。こういうふうな結論でした。

ノーレットランダーシュはデンマークのロスキレ大学で科学社会学の分野で修士号を取得し、デンマーク工科大学に勤めたのち、ジャーナリストとして活躍し、スカンジナビアを代表する科学評論家として有名な人です。そういう人が、利他主義の考え方に引退を勧告しているところが大変面白いと思いました。

そして、こういう文章が慶応大学の入試問題に使われたわけです。この考え方をわかりやすく言うと、たとえば、クラスの雰囲気がとても悪いとき、それを放っておいて、自分ひとりだけ勉強に専念するのはなかなか難しい。クラスの雰囲気がたいへんよくて、頑張ろうとしているときは、自分もそれに自然に引っ張られて頑張れるものです。そういう意味で、自分と他人との関係は切り離された関係ではありません。自分の幸せはそのまま他人の幸せにつながるし、他人の幸せはそのまま自分の幸せにつながっているのです。このように、自分と他人の関係のあり方を見直すべき時期にきていることを、今年の慶応大学の問題は示していると思います。

清風は自分を高めていくことが他人の幸せにつながっていき、他人が幸せになれば自然と自分に返ってくるものだという自利利他の精神を大切にしています。これは時代的にも合っているのだろうと思いましたので今日はお話ししました。

今朝の話はこれで終わります。

学校長